
もう一人の孫策～天虎の生き様～

銀色の空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一人の孫策〜天虎の生き様〜

【Nコード】

N8829Z

【作者名】

銀色の空

【あらすじ】

孫家にはもう一人の策の名をもつ者がいた。

その者が駆ける道はどこか？

「俺は天を駆け抜ける天虎。その背に乗ってみる気はないかい？」

最強で無敵、天下無敵のその男

「姓は孫 字は白蘭だ。名だと？そんなもんとつくの昔に捨てた！

！」

00 自己紹介（前書き）

初投稿です。

よろしくお願いします。

00自己紹介

自己紹介

姓 孫 名 策 字 白蘭

真名 白夜

性別 男

年齢 19歳

顔 上の上 髪 銀色 体 背中に大きな？印^{バツ}の傷がある

性格 基本的に優しく怒ると怖いらしい（はわわ軍師+あわわ軍師談）

敵には何も容赦しない。だが、女だと？

孫家の血が母から受け継いでおり、戦場で一定以上の血を浴びると

虎のようになる。

好きな物（人） 煙管 酒 自分を愛してくれる女

嫌いな物（人） 孫堅 命を軽く見ているいつ 政務

武 呂布をも超えるほど 知 各軍師にも負けないほど

武器 日本刀様な刀を2本を腰の両側にある。

サブ武器 小刀を腰のポーチに10本ちかく入っている

説明

孫策（雪蓮）のいところで孫堅の姉が生んだのが白夜。

だが、父は戦死、母は白夜を生んですぐに死んでしまい孫堅に預けられた。

母が死ぬ間際に（（孫策））という名をくれた。

だが、白夜には武の才能も知の才能もなく。「策」という名を名乗れなくなった。

そのかわり、雪蓮には、武の才能があり王の覇気というものがあつたそして義姉の雪蓮が（孫策）と言われた。

その数年後、白夜が国に追放された。

00 自己紹介（後書き）

これから、頑張るぞ！

01 天虎く母との別れく（前書き）

1 話目です。

よろしゅうなく（くくく）

01 天虎く母との別れく

僕が生まれる前に父は戦死した。
結構名前が知られていたらしい。

そして、母は僕を身ごもった。

とても、嬉しかったらしい。「あの方の忘れ形見です」と涙を流しながら笑っていたらしい。

そして母は、僕を生んだ。

また、泣いていたらしい。

そして母は、病を患った。

そうとう酷いらしく「もういつ死んでもおかしくない」と医者が出てきた。

母は、それを聞いてすぐ僕を呼んだ。

まだ赤ん坊だった僕は、侍女に連れられて母の自室に行った。

「ああ、私のいとしい子」

自室について母は寝ながら、迎えてくれた。

「ちょっと、この子と2人にしてください。」

母は、侍女をさがらせた。

「ふふ、元気ね」

母は笑っていた。

「・・・」

すると、ずっと笑っていた母は、急に何を思ったのか笑みをやめた。

「・・・私は、もうすぐ死にます。」
ぽつりとつぶやいた言葉だった。

「私はもうすぐ死にます。あなたには、幸せになってほしい」
一度息を整えてまた言い始めた。

「あなたは、幸せになっていい人なのよ。それなのに、
私は、あなたに愛というものを教えられなかった。
なにもあげられなかった。」

涙を流しながら言い続けた。

「ふふ、赤ん坊相手に何言っているんでしょうね。」
クスツと笑い、涙を拭いた

「あつ、そうそうあなたの名前だけだね。
あの人が決めたのよ。あのひとつたらね・・・」

それから、父との出会いだとかここがカッコイイだとか
とても強いだとかここが好きだとか

いや、しらんけど（汗）

30分ぐらい？

「・・・つまりこうなったわけよ」

あの、この中ではまだ赤ん坊なんですけど（汗）

「まあ、あなたに言ってもしかたないんだけどね」
はい。そうですね

「それでね、あなたのお父さんはね戦場では『白虎』って言われて
いてね

その髪はあの人の遺伝ね」

そのときの、母の笑顔はとてもきれいだった。

「それで、あなたの名前は、姓 孫 名 策 字 白蘭
どう？いい名前でしょう？」

また、にこりと笑い口を開いた。

「そして、真名は

白夜」

それが、母から聞いた最後の言葉だった。

01 天虎く母との別れく（後書き）

やばい、文才がない

02天虎く雪蓮と冥琳と祭に知り合うく(前書き)

頑張るぞく

02天虎く雪蓮と冥琳と祭に知り合うく

父、母が死んだ。

それから、僕は叔母だという孫堅さんに引き取られた。

白夜5歳

僕は、今『呉』という国にいます。

孫堅さんは「今日から私があなたの母親だ」と言ってくれた。
子供ながらに嬉しかった。

話が変わるが義母（孫堅）には娘がいた

名前は、まだもらってないらしい。

（10歳になるともらえるらしい）

真名は『雪蓮』というらしい。

僕より数ヶ月先に生まれたらしい。

まあ、義姉です。

説明すると・・・とてもウザい

たとえば、朝早く僕の部屋に来て「釣りに行くわよ!!」
と言い、たたき起こされ釣りに連れていかれた。

いや、あなた姫なんですけど（；―――）
いいんですかね（汗）

しまいには、「飽きた」と言い僕と冥琳さんにまかせ森に行ってしまった。

冥琳さんは「仕方ないな」という顔をしていた。

いつもお疲れ様です。

そして帰ってくると木の実などを持ってやってくる

「あゝ火をつけるのは私の役目なんだから」と頬をパンパンにして行ってくる。

はいはい、もう慣れまいたよ。

悲しいことに（泣）

また、今度は「冥琳に怒られた」（泣）「

いや、知らんし（汗）

勝手にしてくれ

また、前の話にいた冥琳さんの説明もしておこう。

冥琳さんの名前は、姓 周 名 瑜 字 公 謹

真名は『冥琳』という。

姉さん（雪蓮）の幼馴染らしい

冥琳さんは、とても頭がいい。

姉さんのことを止められるうちの1人だ。

将来の有能軍師候補だ。

もう一人姉さんを止めれる人がいる。

姓 黄 名 蓋 字 公覆

真名は『祭』という人だ。

義母に仕えており呉の宿将でとても弓がうまい

髪は薄紫でショートヘヤーだ。

歳は「ヒュ」 矢を放った音

サク ピュー

作者の眉間に矢が直撃

返事がないただの屍のようだ。

いやいや、冗談ですよ。 ははは 棒読み

なんか、変な電波が？

まあ、まとめてみると、とても美女ですね。

美（少）女

間違えないように

まあ、暇はしません！（^^）！

ある日、義母に鍛錬を付き合ってもらった。

もちろん、義母には一太刀も当てられなかった。

その日から、義母の僕に対する態度が変わった。

02 天虎、雪蓮と冥琳と祭に知り合う、（後書き）

あれ？

なんか、自己紹介みたいになった？

どうしよう

03 天虎く名を無くすく（前書き）

ちよつと編集します

03 天虎く名を無くす

この前、義母と鍛錬してから義母の態度が変わった。

「休む暇があるなら鍛錬をしろ。寝る暇があるなら勉強しろ」
それから、白夜は文字どおり血を吐くまで鍛錬を繰り返された
それは、各武官、文官から見ても酷いものだった。

「堅殿！あれは、いささかやりすぎですよ！？」

祭が孫堅に向かって強めに言葉を放つ

「そうよ！母様あれはやりすぎよ！」

「孫堅様、私も祭様と雪蓮と同意見です」

祭に続いて雪蓮は、怒りをあらわにし

周瑜は雪蓮のように怒りを表に出してないにしろ、口調はわずかに
怒っていた。

それまで、だまって聞いていた。孫堅は口を開いた。

「あの子には、なにもない」

ポツリとこぼした声を3人は聞き逃さなかった。

「なにがないっていうのよ！？」

雪蓮は怒りを隠さずに怒鳴った

だが、祭、冥琳はなにか思い当たることがあるのか口を開かなかった
するとまた孫堅が口を開いた

「あの子には、武の才能も知の才能も微塵も感じられない」
その一言で十分だった。

祭は、その一言を聞きを手血が出るくらい握りしめ

冥琳は、齒を食いしばっていた。

「で、でもこれから強くなるかも知れないじゃない!？」

雪蓮の言ったことはただの同情だった。

白夜の武の腕前は、壊滅的だった

それは、子供が見てもわかるほどに武の才能が微塵も感じられなかった。

ならば、「知はどうだ？」と勉学をさせて見ると
またも、知の才能というものがまったくなかった。

「そうだ、雪蓮。あの子はまだまだ強くなる可能性がある」
雪蓮の言葉を肯定して返した。

「だったら「だがな!!」「っ!!」

雪蓮の言葉を孫堅がさえぎる。

「まだ、子供だから。じゃあ、ないんだよ!!」
雪蓮達に怒鳴った

「ただ、弱いだけならまだいい。あの子には『才能』がないんだ!？」

雪蓮は啞然とした。

いつもは、優しくずっとニコニコしている母だが、やるべきことはやり

戦場では『江東の虎』と恐れられている母がそこにいた。

「黄蓋！あいつに武の才能はあつたか！？」

祭はなにも言えなかった。

それもそのはずだ。

白夜の鍛錬を一番付き合っていたのは祭だったのだ

白夜の武の才能がないのは誰よりも知っていたからだ。

「周瑜！あいつに知の才能はあつたか！？」

冥琳も祭と同じく白夜の勉強を教えており

白夜の知の才能がないのを知っていた。

「雪蓮！あいつに覇気を感じられたか！？」

雪蓮は、祭や冥琳のようになにも教えてはいなかったが

7歳にして武の才能と覇気が見え隠れしており

気というのを感じとれるほど成長していた。

その雪蓮が見るに何も感じられなかった。

「みなも、わっているのなの？あの子のことを」

「「「・・・」」」

雪蓮達は、また何も言えなかった。

「この話は、ここまでだ。」

と言ひ孫堅は玉座から立ち上がり自室へ戻つて行つた。

雪蓮、冥琳、祭はその後ろ姿をただ見送るだけだった。

冥琳 side

「きいゝ、悔しい！なんなのよ、あのバカ親！？」

祭と別れ冥琳と城の廊下を歩いていたときにいきなり雪蓮が騒ぎ始めた。

「ねえ、冥琳もそう思うでしょ？」

「・・・」

冥琳は何答えなかった。

「冥琳？」

と言ひ、顔を覗き込んできた。

「っ！あ、ああ。そうだな」

と、とつさに答えてしまった。

「嘘でしょそれ。冥琳？」

雪蓮が目を見て聞いてきた

「どうしてそう思うんだ？」

「冥琳のことだもん。わかるよ」

ハズかしなくもなくそんなことを言ってきた。

「孫堅様が言っていたことがな」

「うん。白夜のことでしょ？」
やはりわかるか

「白夜様には悪いと思っているが私も孫堅様の言つとおりだと思つ
私は、はつきり雪蓮の目をみて言った。
それがあの方の『白夜様』のためになるなら

「雪蓮もわかっているのだろう？」

「・・・わかってるわよ。そんなことわかってる!？」
雪蓮は言葉を強めて言い放った。

「・・・わかってるつもりよ。あの子には・・・」
そこから先の言葉は出てこなかった。
ああ、そうだ。私も認めたくない
言葉に出したら認めてしまうことになってしまつから

「雪蓮、つらいと思うが・・・」

すると向こうから足音が聞こえた。

白夜side

今日も、これから鍛錬だ。
つらいけど義母に恩返しするためには強くならなくちゃ

「・・・つてる!？」

うん!？」

なんだ？この声って姉さん？
行ってみよう

「雪蓮、つらいと思うが」

あれ？冥琳もいたんだ。

あつ、冥琳と目があつた

「白夜様」

「何大きい声出してるの？」

「うつん、なんでもないのよ」

姉さんがこれでもかというぐらい手と首を振っていた。

「ふふ、変な姉さん」

「白夜様はこれからどちらに？」

「ん？僕はこれから鍛錬なんだ。」

『鍛錬』と言葉を聞いた瞬間2人の眉間がわずかに動いた

「ねえ、白夜つらくないの？」

と姉さんが聞いてきた。

うつん。つらいかつらくないかで言ったらつらいけど

だけど・・・

「つらくないよ。だって強くなって義母や姉さんや冥琳を守りたい

んだ」

「そう」

「あつ！僕もう行かなきゃ。じゃあね、姉さん冥琳」

「ええ、行つてらっしゃい」「行つてらっしゃいませ」
姉さんと冥琳が笑顔で見送ってくれた。

よし、今日も頑張るぞ！！

雪蓮&冥琳 side

白夜は行ってしまった。

「行っちゃたわね」

「ああ、行つたな」

「やっぱり、まだ信じてみよう。白夜を」

「ああ、そうだな」

神様、お願いします。

白夜（白夜様）の夢を叶えて挙げてください。

心から愛しているあの子に

（白夜様に）

白夜 side

今日、もう一人の妹に会いました

名前は、姓 孫 名 権 字 仲 謀

真名は『蓮華』 歳は3歳で妹です

そして、今日は義母に呼ばれて本城に呼ばれたんです。
なんなんでしょう？

「白夜、お前は名を『策』という名を捨てなさい」

「え？」

数ヶ月ぶりに聞いた義母の言葉だった。

03天虎く名を無くすく（後書き）

疲れた。

頑張りました。

この世界のキャラ設定（前書き）

年齢です

この世界のキャラ設定

黄巾の乱

開催時の年齢

孫策 白蘭

白夜

19歳

蜀

名前

真名

年齢

劉備 玄德

桃香

17歳

関羽 雲長

愛紗

17歳

張飛 翼徳

鈴々

10歳

趙雲 子龍

星

17歳

諸葛亮 孔明

朱里

12歳

馬超 孟起

翠

17歳

黄忠 漢升

紫苑

23歳

鳳統 士元

雛里

12歳

馬岱

蒲公英

15歳

魏延 文長

焰耶

16歳

郭嘉	程？	于禁	李典	樂進	典韋	許緒	荀？	夏侯淵	夏侯惇	曹操	名前	魏	璃々	嚴顏
奉孝	仲德	文則	曼成	文謙		仲康	文若	妙才	元讓	孟德				
稟	風	沙和	真桜	凧	流琉	季衣	桂花	秋蘭	春蘭	華琳	真名			桔梗
1 6 歳	1 4 歳	1 7 歳	1 7 歳	1 7 歳	1 2 歳	1 2 歳	1 4 歳	1 7 歳	1 7 歳	1 4 歳	年齢		5 歳	2 4 歳

呂布	賈馮	董卓	名前 その他	呂蒙	周泰	甘寧	陸遜	黄蓋	孫尚香	孫權	周瑜	孫策	名前 呉	張遼
奉先	文和	仲穎		子明	幼平	興霸	伯言	公覆		仲謀	公瑾	伯符		文遠
恋	詠	月	真名	亞莎	明命	思春	穩	祭	小蓮	蓮華	冥琳	雪蓮	真名	霞
1 7 歳	1 4 歳	1 4 歳	年齢	1 5 歳	1 5 歳	1 7 歳	1 6 歳	2 7 歳	1 2 歳	1 6 歳	1 9 歳	1 9 歳	年齢	1 7 歳

ミケ	トラ	シヤム	孟獲	張梁	張宝	張角	張勳	袁術 公路	陳宮 公台	公孫贊 伯珪	顏良	文醜	袁紹 本初	華雄
			美以	人和	地和	天和	七乃	美羽		白蓮	斗詩	猪々子	麗羽	
1 1 歳	1 1 歳	1 1 歳	1 1 歳	1 5 歳	1 6 歳	1 7 歳	1 6 歳	1 1 歳	音々音	1 6 歳	1 7 歳	1 7 歳	1 7 歳	1 7 歳
									8 歳					

この世界のキャラ設定（後書き）

どうだろう？

こんな感じです。

04 天虎く孫家を追放されるく（前書き）

これからどうしよう？

04 天虎く孫家を追放されるく

『『策』という名を捨てる』

義母からそう言われた日から義母は僕と眼も合わさないようになっていた。

姉さんは、またギヤーギヤー言っていたが義母は聞く耳を持っていなかった。

白夜side

「ハッ、フッ、ハッ」

義母から『名を捨てる』と言われてから今まで以上に剣を振り続けた。

「（僕が弱いから）」

その回数が数十、数百を超え腕が上がりなくなるまで振り掌（手のひら）から血が出るまで振り続けた。

「（いつつ！またマメがつぶれちゃった）」

笑顔を見せた

だが、その顔を見せたのは一瞬ですぐに何かを考え始めた

「あの言葉の意味って何だったんだろう？」
ぼつりと溢した言葉は周りに木霊した

あの言葉を、言われてから
なぜだか涙がこぼれてきた。

僕はまだ認めてもらってないのか？

僕が弱いから？

僕の頭が悪いから？

考えれば考えるほど短所が思い浮かぶ

あの日から自分の部屋で涙を流した

1日泣いてなにかふつきれた

「泣いてばかりじゃだめだ！？」

そうだ。泣いてばかりじゃだめだ！？

弱いなら鍛錬を今までの倍やればいい

頭が悪いなら勉強を今までの倍やればいい

絶対に認めさせてやる！？

雪蓮 side

なんだか最近白夜の様子がおかしい？

いつもよりなんだか鍛錬や勉強に励んでいる

まあ、このまま何かの才能が開花するかも知れないし

頑張ってね大好きよ白夜！？

冥琳 side

最近、白夜様の勉学の励み方が尋常だ

一度聞いてみた

「白夜様、最近勉強に対する姿勢が変わって来ていますね」

「えっ！まあ、うん」

あいまいな言葉を返してきた

「白夜様？」

私は知りたかった

この方が悩んでいることを

あきらかに白夜様の様子が変わった。
いつからだ？

たしか、3日前・・・

「なんでもないよ。冥琳」

考え込んでいるときに白夜様がニッコリ笑いながら言い放った

「・・・」

「冥琳？」

ああ、今の私を見ないでください

今の私は絶対に顔が赤いから

あなたは、ずるい私の心を震わせる

軍師として私情や同情をかけてはいけない

それは、幼いころから言われ続けてきた

だが、このお方は私の心を震わせる

「・・・りん！？冥琳！？」

気がつけば白夜様がに呼ばれていた

「はい！？なんでしょう？」

できるだけ冷静を装って返答した

「いや、なんかいきなり静かになったからさ」

「申し訳ありません。ちよつと考え事を」
嘘はいつてない・・・はずだ

「とりあえず、僕はなにもないから

あつ、もう鍛錬の時間だ。また今度頼むね。冥琳」
と言ひ白夜様は部屋を出て行つてしまった。

あつ、行つてしまわれた

白夜様私はあなた様を信じております

私はあなた様の味方ですよ

祭side

ふーむ？

最近、策殿の様子がおかしい
しきりに「鍛錬しよう!？」と声をかけてくる
おかしいのう？この前までも真面目ちゃんだったんじゃが
最近は異常じゃのう

策殿は、初めてワシが受け持った子じゃった。
だが、策殿には武の才能がなかった

じゃが、なぜ目で追っているんじやろう
努力する男は嫌いではない

ふーむ？

・・・まだ、ワシもいけるかのう？

白夜side

今日、僕は8歳になった。

数ヶ月ぶりに義母に呼び出された。

今、僕は本殿にいる

あつ、姉さんや冥琳、祭さんがいる

「義母上、ご用件は何でしょう？」

何なんだろう？

「白夜、あなたは今日で何歳になりましたか？」

「8歳でございます」

誕生日のことかな？

「そう」

とぼつりと言葉をこぼした

「あなたは、この国に孫家に必要ない人間です・・・・・・・・あなたをこの国から追放します」

「え？」

その時、すべての音が止まった

04天虎く孫家を追放されるく（後書き）

頭の中が混乱する

冥琳のキャラが崩壊してないか？

05 天虎く師匠ができるく（前書き）

ふくむ

サブいですな

「お前の気持ちもよくわかる。」

「だがな、今だからこそ落ち着いて対処するべきだ」

冥琳は、手から血の気がなくなるまで握りしめた。

雪蓮も冥琳の様子に気がついたのか唇を噛みしめ静かになった

冥琳は雪蓮の姿を確認し孫堅に言葉を放った

「孫堅様、理由を聞かせていただいても？」

「理由は先ほどいったらう？」

「あんなのは理由になりなせん！？」

本殿にいる者たちはざわめいた

いつもは冷静で物静かな冥琳がそれも孫堅に向かつて怒鳴ったからだ。

「堅殿、私も反対です」

「わたしもよ！？」

上から祭、雪蓮が冥琳に続いた

「孫堅様もう1度ご判断を！」

と言い冥琳は頭を下げた

それにつづき祭、雪蓮も頭を下げた

だが、

「だめだ。決定は変えられん」

帰ってきたのは冷たい一言だった

「白夜、城門に行きなさい。

そのの、3人自室で頭を冷やせ」

言葉を発し本殿から出て行ってしまった

「母さん!？」

「孫堅様!？」

「堅殿!？」

そして、3人は兵たちに連れて行かれてしまった。

そして、白夜は今城門にいる

「白蘭様」

すると侍女が近寄ってきた

「白蘭様、これを」
渡された物は、

数日分の路銀と
小さな小刀だった

「では、白蘭様。おきおつけて」
と侍女は帰って行き、門がしまった

そして、白夜は世界で一人になった。

白夜side

これからどうしよう？

白夜は、捨てられたというのに冷静だった
悲しいはずなのに泣けなかった。涙が出なかった

ここが、どこだかわからない
目は開いているが前は見えてはいなかった

「ここ何処だ？」
気がつけば何処だかわからない場所にいた

「おい、その小僧」
声をかけられ振り返ってみると男の3人組がいた

賊side

なんだこの餓鬼？

なんでこんなところに1人でいるんだ？

まあいい、結構なもん持つてるようだし小遣い稼ぎしとくか

「おい、餓鬼いいもんもってんじゃねえか？」

「えっ？」

「金目の物置いてけや、だったら命は助けてやるよ」

「あつ、はい!？」

やっぱり、金づるだったか
ん？あの小刀なかなかな

「おい、その小刀も置いてけや」

「えっ？こ、これだけは!？」

なんだ？そんなに大切なもんなのか？
もつとほしくなったな

「いいから、渡せ!!」

ドカツ

腹に蹴りを繰り出した

「グッ!」

白夜は数メートル先まで吹っ飛んだ

その際に、小刀を落とした

「へっ、最初から渡しとけばいいんだよ」

小刀を拾ったさいにチビが

「兄貴、もういつそ殺しちゃいましょうや」

「そっそうなんだな」

デブまでもそう言ってきた

そうだな？殺しちゃうか

「・・・えせ」

小僧がフラフラになりながら立ちあがってきた

「あ？」

「かえせ、返せよ屑虫が！？」

ん、だどこの餓鬼が！？

やぱり、殺すか

「餓鬼、怨むんならここで俺たちに会っちゃまった
運命を恨みな」

と腰から剣を抜き振りおろしてきた

白夜side

義母から貰った。小刀が奪われた
これだけは、渡せない

「えっ？こ、これだけは！？」

これは、義母に貰った大切な物
絶対に渡せない

「いいから渡せ！？」

ドカツ

腹を蹴ってきた

「グッ！」

やばい、小刀を落とした
取り返したいのに体が動かない

「兄貴、もういつそ殺しちゃいましょうや」
え？殺す？

僕を？

ふざけるな、何で死ななくちゃいけない
僕が何したっていうんだ？

ああ、もういいや

どうせ死ぬならおめーらも道ずれだ

「かえせ、返せよ屑虫が！？」

死なんか怖くない

死ぬことなんざ

「餓鬼、怨むならここで俺たちに会っちゃまった
運命を怨みな」

やっぱり怖いよ、母さん

今、剣が振りぬかれた

ガキン

「この子は、死なせないわよん」

そこには、パンツ一枚の変態（漢女）がいた

貂蟬side

ふーん、ここが新しい外史ねん

この外史にはご主人様はいないようね

「誰がこの外史の主人公なのかしら？」

この世界は新しくできた外史

北郷一刀という存在がない外史

その外史を見に来ただけど

まだ、黄巾の乱も終わってないのね

じゃあ、見る者も見だし帰りましょ「返せよ屑虫が!？」っ！

な、なにこの力は？

これは、気？いや、違うわねん。

これは『覇気』ね

どんな子なのかしら？

ま、行ってみましょ!？

ここらへんのはずなんだけど？

「餓鬼、怨むならここで俺たちに会っちゃまった
運命を怨みな」

やばい！？

気がついたら足が動いてこの子をかばっていた

あゝ、そうなのねん

この子がこの外史の・・・

「この子は、死なせないわよん」

守ってあげるわ。

だってこの子は、この世界にとっての大切な人なのだから

白夜side

なんだ？

空からなにか振ってきたぞ？

何者だ？

「よく頑張ったわねん。坊や」
坊や？

ということは味方が
よかった。死ななくていいんだ
よか・・・った

そこで、俺の意識はなくなった

貂蟬side

あらん？寝むちやったのね

私が来て安心したのかしらん？

「な、なんだこの化け物は！？」

「な〜んですって、誰が一度見たら二度と忘れない程の化け物ですって〜」

「そっそこまで言ってな」

「問答無用！！ふんぬ〜」

三馬鹿たち一人一人を殴り飛ばし星にしたのであった

「んっもう失礼しちゃうわ
とプリプリ怒っていた

「それはそうとこの子どうしましょ？」
白夜を見ながら呟いた

「このままっていうのも可哀想だし、お持ちかゲフン、ゲフン
拾っていきましょ」

助かったのか助かってないのか？
わからない白夜なのであった

白夜side

ここはどこだ？

お花畑？なんで俺はここにいるんだ？

白夜はお花畑を歩いていて

あれ？あそこにいる人って？

白夜は走り出した。

あの人が誰だかもわからないのに

でも、確信したあの人は・・・

「母さん！？」

白夜が見たのは夢だった

だけど、夢だと信じたくなかった

「あらん、起きたのね？」

んっ？な、なんだこのひと！？

何で裸？何でパンツ？っていうか筋肉すご？

白夜は軽く混乱していた

「びつくりしたわよ、歩いてたら賊にあなたが
襲われていたんだから」

えっ？賊？

あっ・・・小刀！？

「あっあの賊は！？」

「んっ、私が追い払ったわよん」

そ、そんな

まだ、取り返してないのに

「あなた何を背負っているの？言ってごらんなさい」
と裸の人が聞いてきた

「・・・じつは」

話した。今までのことを

母が死に義母に引き取られたことを
国を追放されたこと

そして、あの小刀のことを

裸の人は真面目に話を聞いてくれた

しゃべり終わると裸の人は「つらい人生だったのね」
と喋ってくれた。

その瞬間、涙が出た

「あつあれ？なんで涙が」

分からなかった

辛いなんてぜんぜん思わなかったのに

「いいのよ。泣いても。あなたは泣いていい資格を持っているわ

今だけ、今だけはおもいきり泣きなさい」

その言葉を聞き自然と涙がこぼれた

うん。今だけは、今だけはおもいきり泣こう

そして、一人の子供の泣き声が森に木霊した。

次の日、僕は裸の人の前に正座した

「お願いします」

と言い、頭を下げいわゆる土下座になった

「どういづつもりかしら？」

「僕に、いや俺に武術を勉強を教えてください」

僕はこの人に教えてほしかった

力とは何かを

正義とは何かを

「何故？」

何故だつて？

そんなの、決まってる

「守りたいんです。俺の手の届く物全部を

守りたいんです！？」

そう、これが俺の本心だ

「だけど、俺は弱い。頭も悪い

だけど、今やんねえと自分が自分じゃなくなる」

自分の想いをありつたけぶつけた

「わかったわ、・・・だけど私は厳しいわよ？

修行中に死ぬかもしれないし？」

と脅してきた

「死ぬ覚悟なんざいつでも出来てる

だがな・・・死のうと思ったことは一度もねえ!？」

「そう。私の名前は貂蟬よ 今日から師匠いいなさい」

「はい!？俺の名前は、姓は孫 字は白蘭 真名は白夜です」

「ん？白夜ちゃん『名』はどうしたの？」

えっ？そんなもの・・・

「とうの昔に捨てましたよ」

そうだ。これからは孫策白蘭じゃない

今日からただの『孫 白蘭』だ

ぜってーに強くなつてやる!？」

05 天虎く師匠ができるく（後書き）

貂蟬が師匠になりました。

無理やり過ぎたか？

下手だつたらごめんなさい
長くてもすいません

天虎く番外編 貂蟬、卑弥呼に語る（前書き）

あけましておめでとございます

今年もよろしく願います

天虎く番外編 貂蟬、卑弥呼に語るく

あれから、俺たちは近くの村に行き
小さな小屋を借りた

白夜side

「師匠？何でこんなところに？」

修行なら山のほうがいいと思うが？

「最低、安心して眠れるところがあつたほうがいいでしょ？」

うん？そんなものなのか

あつそれより修行！

「師匠、修行は！？」

師匠は、ため息をつきながらこう言った

「あのねん、この村に着くまで日が暮れるまで歩いたのよ？」

私ならともかく白夜ちゃんはまだ基礎ができていな状況なの

しかも、白夜ちゃん。あなたは気づいてないようだけど

あなたは、とても疲れているは、休むのも修行よ」

と師匠は言った。

うん？そんなものか

「わかりました。では、師匠お先に失礼します」

ぺこりとお辞儀をし、寝台に入った

まあ、師匠がそう言うならそうなのか
それよりも明日から修行だ！
そのためには、早めに寝ないとな

その数分後、白夜は深い眠りについた
そして、夜は進んでいく

貂蟬side

あらん？眠っちゃたようね？
背負って走れば全然日が暮れないうちに来れたんだけど
でも、それは白夜ちゃんのためにならないし
グフフ 白夜ちゃん？明日からたっぷり可愛がってあげるわ（性的
な意味ではなく）

ん？あらん、あらん？
この気はまさか？

「そこにいるんでしょう？卑弥呼」

「ふむ、やはりばれてしまったか」

この人は、卑弥呼と言って私と一緒にの管理者
そして、私の師匠でもあるわ

「ん？貂蟬よ誰に喋りかけておる？」

「なんでもないわ卑弥呼、ただの読者サービスよ」

「ほう、そうだったか」

なんでここに卑弥呼がいるのかしら？

まあ、大体は想像つくけど・・・

「我が弟子よ、お主何をやったかわかっているのか？」

あゝ、やっぱりこの件ね

「何がかしら？」

私は、可愛く、と・て・も可愛らしく聞き返した　ここ重要（貂蟬談）

「その顔をやめんか、わかっているのだろうか」

我々のルールを」

そう、私は今、管理者というルールを破っている

管理者とは、新しくできた物語

つまり、『外史』を管理する者のことをいう

管理者のルールはいたって簡単

『外史を改ざんしてはいけない』こと

もつと簡単に言ってみれば死んだ人または死ぬ定めの人を助けてはいけないことだ。

それを、貂蟬は、破ったのだ

「おぬしは、管理者のルールを破っているのだぞ？」

卑弥呼は少しドスの聞いた声で言い放った

だが、貂蟬は

「ええ、それが何？」
と平然と言い放った

「おぬしな」

は、と卑弥呼はため息をこぼした

「じゃあ、聞くんだけど

私が救った白夜ちゃん、孫白蘭を救っても
何故この外史は消えないの？」

「む？それはだな」

さすがの卑弥呼でも言葉が詰まった
過去に、管理者が外史の住人を助けたところ
その外史は消えてなくなったからだ
だが、この外史はまだ続いている

などと考えている内にぽつりと言葉を漏らした

「私は、こう思ふのよ」

「む？」

「私もこの外史の一部なんだって、この外史に来て
白夜ちゃんを助けたとき感じたのよ。

ここが、この物語最初の、序章なんだって」

卑弥呼は言葉を失った

数百年いや数千年、外史の管理者をやっているが
管理者までも外史の一部になることがなかったからだ

いや、ありえないことだからだ

「つまりは、お主が助けることが決まっていた外史だと?」

「ええ、そういうことね」

貂蝉は笑いながら言い放った

「それに、初めて白夜ちゃんを見たとき

私は『恐怖』を感じたわ。この私がね」

卑弥呼はまたも驚いた

貂蝉の強さは卑弥呼も認める程の武の持ち主だからだ
そんなものが恐怖を感じるなど・・・

「では、その者は」

「ええ、あと数年私のもとで修行すれば

私、卑弥呼でさえも勝てないでしょうね」

「何!? それほどまでか?」

「まあ、白夜ちゃんは才能がないと思っているのでしょうか?

白夜ちゃんは、才能がないんじゃないじゃなく開花していないだけなんだ
けど」

「それほどまでとは」

だが、新たな問題が発生した

「だが、もしもそ奴が闇に染まりでもしたら」

卑弥呼は今の話を聞いていて少しばかり恐怖を感じた
その者がもし闇にでも染まったらと思うと

「大丈夫よ、卑弥呼」

と貂蝉は何事にも動じずに言った

「ふむ、その根拠は？」

「まず一つ目は、白夜ちゃん目を見てわかったの
この子は悪人にはならないって
ううん、なりきれないって」

「ふむ、ほかの根拠は？」

「最後の根拠は………
漢女おとめのカンよ」

ドーン

と言う効果音がつきそうぐらい自信をもって言い放った

最初は、ポカーンという顔をしていた卑弥呼だったが
しまいに、頬が緩んでいき

「ガハハハ、そうかそうか、それなら安心じゃ」

何故か通じ合っていた？

「では、お主はこれからその奴を」

「ええ、修行させていくつもりよ」

「そうか、ならワシも手を貸そう」

「ええそうしてくれるとありがたいわ
……それから卑弥呼？」

「ん？なんだ？」

「白夜ちゃんが背負っている過去は、想像以上よ」
貂蟬はどこか悲しい顔をしていた

「……うむ、わかった」

そうして、漢女^{おとめ}たちの夜は更けていった

貂蟬 side out

次の日の朝

「はーあ、おはようございます。師匠」
眠りから覚めた白夜は居間にいる師匠にあいさつをした

「ええ、おはよう白夜ちゃん？」

「はい、おはようございます」

「あつ、白夜ちゃんに紹介したい人がいるのよ」
といい貂蟬は外へ出て行き誰かを呼びに行った

「ごめんね、待たせて」

「いいえ、ぜんぜん」

と白夜は手を横に振った

「紹介したいのは、私の師匠なのよ

一緒に白夜ちゃんの修行を見てくれるそうよ」

「えっ！本当ですか？」

そのことがとても嬉しかったのか満面の笑みを浮かべた

「卑弥呼入ってきなさいな」

「うむ」

と言い、入って来たのはなぜか素肌に服を着ており
下半身には、フンドシ一枚の漢女おとめ入ってきた

「今、紹介された卑弥呼というものじゃ
今日から先生と呼ぶがいい」

「はい！先生

俺の名は、姓は孫字は白蘭

真名は白夜です」

2人とも自己紹介を終えた

「じゃあ、今日から修行ね」

「うむ、そうじゃの！」

「はい！」

上から貂蟬、卑弥呼、白夜の順で言葉を発した

「じゃあ、行くわよ」

「うむ」

そして、白夜は

「うし！」

と頬を叩いて師匠たちを追った

そして、師匠、先生による

修行が始まった

天虎く番外編 貂蟬、卑弥呼に語る（後書き）

眠い

頑張りました

よいお年御

06 天虎く未来の霸王と猪その妹に会うく（前書き）

ドンと時間が進みます

06 天虎く未来の霸王と猪その妹に会う

白夜side

あれから、4年たった

俺は今12歳になった。

この4年に起きたことといえば

『孫堅の死』だ。

師匠がそのことを教えてくれた時は時が止まったように感じた
あの、義母が死んだ？

だが、

今さら止まるわけにはいかなかったからな

俺は修行を続けた

一度師匠に「つらくない？」と聞かれたことがあった

そりゃ、悲しいに決まってる

あんな扱いを受けた俺だけど俺にとっては
大事な母だった

そりゃ、何で俺を捨てたんだ？

何で捨てられなきゃいけないんだ？

と義母を怨んだことだってある

だけど、今は怨んでねえ……かな？

いや、かな？つておかしいかも知れねえけど俺自身も

わかんねえんだよな、国から追放されて世の中を見ることもできた
それに、師匠や先生にも会えて力を知くれた

たぶん、あのまま国に居続けたら師匠や先生にも世の中が

どうなっているのかもわからなかったただのう
だから、怨んでねえっと言っちまってるけど
たぶんだけどもまだ心の片隅に怨みってのが残っている
これは、一生、心に残ると思う

だけど、俺はもう前に進むって決めたんだ
この背中、『傷』にかけてな・・・

おっと、話を戻すと

この4年俺と師匠、先生と地獄のような修行をした
何回死のうと思ったか・・・

そんな時師匠は俺に

「白夜ちゃんは、武と知の才能がないわけではないのよ
たとえば、私たち人の中には才能と言う物があるの
それは、生まれてすぐ開花するか、それとも歳を
重ねてじっくり開花させるかよ」

すると、師匠は近くの石をとり

「これを私の才能の塊だとすると

白夜ちゃんの才能はそこにある

小石。いえ、砂の一粒ぐらいなのよ

だから、私たちは その一粒を開花させるのよん
」

何度も死にかけた

今まで呉でやってきた鍛錬なんて

ただのお遊びだったんだと思うまで

辛かった、苦しかった

でも、自分でもわかるくらいドンドン

強くなっているのがわかった

嬉しかった、これで自分の周りの人を守れると思った

そんな、ことを思いながら修行4年の俺の誕生日に

「免許皆伝よん」「うむ！そうじゃな」

唐突に師匠と先生から言われた。

まあ、嬉しかったけどそれ以上に嬉しかったことは

「これは、そのお祝いよ」

と師匠が差し出してくれたのは、見たこともない刀2本だった

「この刀は日本刀と言ってね、扱いは難しいでしょうけど

今のあなたなら扱えるわ」

と師匠に日本刀という刀二本を貰った。

刀を貰った俺は上半身の服を脱ぎ捨て

貰った刀を二本とも鞘から抜き両手で刀を

背中につけ刀を引っ張りあげた

ブシュー

背中から血が拭きでる

「ちょっと！？白夜ちゃん！」

「白坊！？何を？」

師匠と先生はその姿を見て動揺した

「俺は、国を追放されましたけど俺は守ると決めたもんを

守れなかった。だから、俺はこの『恥』を一生背負っていく

師匠言いましたよね？武人の背中にある傷のこと」

白夜は痛みを噛みしめながら貂蟬に言った

すると、貂蟬と卑弥呼は、そういうことかとわかつたらしい

「ええ、言ったは『背中傷は武人の恥』だつてね」

「しかしなんと無茶なことを」

白夜はその答えに満足いつたのか
静かに気を失った

そして、目が覚めると師匠と先生に「「無茶すぎ」」
と怒られてしまった
ですよねー俺自身もそう思う

傷が治り俺は旅に出ることを決めた

「師匠、先生、旅に行ってきます」

師匠と先生はその言葉を待っていたと言わんばかりに
賛成してくれた

「ええ、今のあなたなら」

「うむ、寂しくなるが自分考える信念を貫け!!」

「はい!」

そして俺は旅の準備をしているときに後ろに気配を
感じ振り返ってみると師匠がいた

「白夜ちゃん、けして自分の誇り『魂』だけはおっちゃだめよ」

「わかっています」

数日後、師匠と先生から貰った刀を両腰に一本ずつ付け
数日分の路銀を貰い、師匠達を背に果てなき荒野へと歩いて行った

「寂しくなるわね」

「うむ、寂しいぞ」

「あの子は、本当に私たちの想像を遥かに超えていくわね」

「そういえば、先ほど何を聞いていたのだ？」

「白夜ちゃんに聞いたことなんだけど白夜ちゃんのお父様は
戦場で『白虎』っていわれていてね

白夜ちゃんに聞いたら自分が名乗りたいのは『天虎』だって
言っていたの」

「天虎とはなんだ？」

「白夜ちゃんはこう言ってたわ

天を駆け抜け大地を焦がすってね」

「ふーむ？天を駆ける虎か」

「ええ、略して天虎」

「ふむ！白坊らしい、これからが楽しみだ」

「ええ。

白夜ちゃん、あなたの物語はここからよ」

そして、物語は始まる

白夜 side out

それから数日後
現在白夜は？

とある地の川で釣りをしていた

「いやゝまいった。路銀がなくなってどうしようと思っていたら川があるとはな」

そう白夜は師匠達から貰った路銀をすべて使い無一文だったからだ
白夜の数日を振り返って観ると

四日前、荒野を歩いていると村らしきところのだがここで
山賊登場・・・数分後山賊たちは天国へ召された

一昨日、村で一休み、路銀を使う

昨日、餓死寸前の子供を発見食べ物恵んでやると

どこからか子供大量発生・・・数分後、路銀空っぽ

人が優しすぎる白夜であつた

「あー、腹減った。早く釣れねえかな」

今は、昼過ぎ、路銀がなくなり朝飯も食べれなかったのだ

「おっ、きたきた大きいな」

白夜の竿に当たりが来たようだ

「なかなか重いな、だがぜってゝ逃がさん俺の昼飯」
竿に力を入れ引き上げようとしたそのとき

ヒュン

ブチン

「あ」

どこからか飛んできた剣の刃が釣り糸に当たり
釣り糸を切ってしまった

ブツチン

「ふ、ふふふふ……ぶつつつつ殺す……!!」
次に切れたのは白夜の怒りだった

「だれじゃ……!!」

と声を放ち鬼の形相で剣の飛んできたほうえ走って行った

??? side

迂闊だったわ

ここいら最近にこのあたりには賊が出ないという情報をもとに
お供の春蘭と秋蘭をつれて散歩していたのに
まさか、今日に限って現れるなんて

「嬢ちゃんら、金目のもん置いてけや」

「置ってたら悪いようにはしないぜ」

絶対に嘘だっということがわかる

私は小さなころから勉強や人の見分け方を学んだ

大抵なことは目を見ればわかる

この賊たちは明らかに盗むものを盗んだら私たちを殺す気だっ

すると、賊の一人がわたしに手を伸ばし

「なあ、嬢ちゃんら聞いてる？」

賊の手が私に触れるその前に

ヒュ

私の目の前を剣が通過した

「貴様――華琳様に触れるな――！」

春蘭が賊相手に剣を振るった

「あぶねえな！おい！」

「へい」

賊は春蘭の後ろに回り込み剣を掴み向こうへ放り投げ春蘭を抑えつけた

「なっ！何をする！？」

「へへ、お返しだっ」

賊の一人が私たちの前へ現れ春蘭を殴り飛ばした

「ぐっ！」

「姉者!？」

妹の秋蘭も姉を助けようと向かおうした時

「おっと、いかせねえぞ」

すぐに賊が秋蘭を抑えつけた

すると、賊の一人が

「頭、もう殺したほうが早いんじゃない？」

「そうだな、もうやっちまうか」

賊の頭らしき奴が剣を抜き近寄ってくる

「小娘、死んでもらうぜ」

と剣を振り落とした

「「華琳様——」」

春蘭も秋蘭も叫んでいる

死んだらそこで天命に見放されたこと
でも、

でも、

死にたくないな

爺様、父様、母様、春蘭、秋蘭

先に行くわ

先に行く私を許してね

それから・・・

頬を涙が流れる

「みんな、ごめんね」

ガキン

金属と金属がぶつかり合う音がした

目を開けてみると

そこには・・・

「おいおい、まだ諦めるには早過ぎるぞ」

銀色の髪をした男が立っていた

白夜side

ぜってゝ殺す

飯の怨みは怖いぞゝ

「!？」

なんだか向こうのほうがうるさい

「まったく、うるせえな。何やってんだよ」

と思い近くまで行つて覗いて見ると金髪の女の子に
賊らしき男が剣を振り落とした

やばいつ!?

本能で少女の前に飛び出してしまった

「みんな、ごめんね」

ん? 誰に謝つてんだこいつ

ガキン

刀で振り落とした剣を止める

「おいおい、まだ諦めるには早過ぎるぞ」

「なっなんだデメエ!？」

あーうるせえ。はい、お前死罪

あいにく今、俺はものすごく怒っています

えーと、賊らしき人らは全員で7人か

楽だな今回は

「なっくに、ただの旅人ですよ

ただし・・・」

俺はもう片方の刀を抜き相手に向け

「人には天虎つて言われてるがな!！」

そして、俺は賊相手に向かっていた

06 天虎く未来の霸王と猪その妹に会った（後書き）

頑張ったような気がする

感想待ってます

11の世界の設定2（前書き）

強さと頭のよさを

では、どう

この世界の設定2

真名で紹介します

武官編

武の強さ

白夜>>>(人として超えてはいけない壁)>>恋>>>愛紗・春
蘭・雪蓮>>>
鈴々・祭・星・霞>>翠・秋蘭・思春・華琳>>>紫苑・桔梗>>
亞莎・明命・凧・焰耶
>華雄・蒲公英>>流流・季衣>>真桜・沙和>蓮華・白蓮・猪々
子・斗詩>>>
>>>小蓮・美以>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>桃香>>麗羽

軍師編

頭の良さ

朱里>>冥琳>雛里・華琳>>白夜・風・凧・桂花・穩・七乃(袁

この世界の設定2（後書き）

どうでしょう？

っていうか、華琳軍師いらんだろ

編集しました

07 天虎く未来の覇王を救うく（前書き）

頑張りまっしょい

07 天虎く未来の霸王を救う

「人には天虎って言われてるがな!!」

という言葉を放ち一番近くにいた賊の首を飛ばす

「まず、一人」

この一言が賊たちを恐怖させた

「や、奴は餓鬼一人だ、囲んで殺れ」

賊の頭が部下たちに指令を出す

「死ねや餓鬼――――」

今度は3人白夜に突っ込んできた

「三下が」

突っ込んできた賊たちが剣を振り降ろしたところを

白夜は刀一本で簡単に止め

もう片方の刀を手の中で逆手に持ち直し

賊たちの腰から切り込み3人を真つ二つにした

「あと、3人」

「な、なんなんだよ。お前は」

賊は恐怖ではない何かを感じていた

それはまぎれもない『死』を感じていた

まぎれもない今、目の前にいる子供に部下を殺し返り血を浴びている子供に

「あ、アニキ。こ、こいつ天虎って」

先ほどの台詞を思い出したのか賊の部下が騒ぎ出した

頭（賊）side

何なんだよこいつは

最初はただの餓鬼だと思っていたが

あつという間に一人、また一人と部下が死んでいった

ほんとに何なんだよこの餓鬼は

「あ、アニキ。こ、こいつ天虎って」

すると部下の一人が顔を真っ青になりながら言ってきた

天虎？どっかで聞いたことが？

「何だ？その天虎ってのは？」

「アニキ知らないんすか！？」

天虎ってのはですね・・・戦場を駆け白銀の髪に血を浴び敵を狩る姿はまさに虎

天を駆け抜け大地を焦がす・・・それを全部略して『天虎』」

思いだしたぜ！

そっぴや、この前向ここの山の山賊たち300人が壊滅したっていう噂を聞いた

それを見た奴はこう言う・・・「天虎」と

最近だが賊たちもつばら噂していることがある

『天虎には近づくな』

こいつが天虎だっというのかよ
こんな餓鬼が

「おい、何時まで喋ってるんだ？」
その言葉で冷や汗が止まらなかった

頭（賊） side out

白夜 side

へー、俺ってそう言われてんだ
まあ、俺も言ってたところもあつたんだが
まさか、ここまで名が広がっているなんてな

・・・いやゝ人気者だな俺

ゴホン、まあそのことは置いといて

「おい、何時まで喋ってるんだ？」

まずは、こつらを・・・殺すか

白夜 side out

白夜は標的をあとの3人に決めた

「ほら、こいよ。屑ども相手してやる」

白夜は賊たちを挑発し始めた

普通の人はこんな挑発には乗らないのだが
奴らは・・・

「この、餓鬼が！」

「調子に乗りやがって！」

賊の2人は簡単に挑発に乗り
剣を抜き白夜に突っ込んできた

「馬鹿が」

ぽつりと言葉を漏らし

2人の剣を刀をクロスにして受けとめ

そのまま、刀を剣の刃の上を滑らせ2人を真横に真っ二つにした

「あと、1人だ」

あと一人の賊を見つめると

「動くんじゃない、こいつを殺すぞ！」

近くにいた黒髪の子供の首に小刀を向けた

「春蘭！？」

「姉者！？」

二人の女の子が叫ぶ

その見て白夜は

「・・・で？」

逆に聞き返してした

「は？」

「いや、殺すなら殺してみろよ

・・・できるならな」

「え？」

白夜は一瞬で賊の後ろに回り込み首を飛ばした

そのとき、賊が最後に見たものは、白銀の髪を血で染めていた天虎の姿だった

華琳 side

最初は本当に助からないと思っていた

こんな、男に何ができると

だが、今、目の前にいる男は一瞬にして賊7人を殺した

その姿に私は恐怖した

だが、ほかの感情に私は美しいと思った

この私が男に見惚れるなんてね

それに、この男が最近噂になっている天虎なのね

ふふ、ほしいわね

華琳 side out

白夜 side

あゝ疲れた

無駄な労力使っちゃったな

・・・血だらけだな俺
さっきの川に行くか

つと、その前に

「お前ら大丈夫か？」

「ええ」

「う、うむ」

「ああ、助かったぞ」

上から、金髪、黒髪、青髪が言ってきた

「そつか、じゃあな。」

「これからは気を付けろよ」

と手を振りその場から立ち去ろうとしたとき

「ちょっと待ちなさい」

金髪が服を引っ張り、声をかけてきた

「あなた、名前は？」

「人の名前を聞くときは自分から名乗れって言われなかったか？」

「貴様――華琳様に向かって!!」

黒髪は俺に向かって怒鳴りつける

それを、

「姉者!やめろ!」

青髪が後ろから黒髪を止めていた

「やめなさい!春蘭」

「むう、申し訳ありません」

金髪の一声で黒髪が静かになった

「ごめんなさい。家のものが

それより私の名前は、姓は曹、名は操、字は孟徳

真名は華琳よ」

「華琳様!?!こんな奴に大切な真名を」

「この人は、私たちの命の恩人

真名を預けるのはあたりまえよ。あなたたちも名と真名を言いなさい」

「はあ、華琳様がおっしゃるなら」

「はっ!」

なんかドンドン話が続いてくんだが

「あ、あの？話聞い「我が姓は夏侯、名は惇、字は元讓、真名は春蘭だ」てないよね」

「私の姓は夏侯、名は淵、字は妙才
真名は秋蘭です。助けていただきありがとうございます」

「いや、気にすんな」

こいつは、いい奴だ
うん。いい奴だな

「じゃあ、あなたの名は？」

金髪、いや華琳が俺に聞いてきた

「俺の名は、姓は孫、字は白蘭
真名は白夜だ」

「真名まで？」
華琳が俺に問う

「ああ、お返した
それに、女の子には優しくしろって師匠や先生が言っていたしな」
俺は華琳、春蘭、秋蘭にそう言いながら笑顔を見せた

「／／／」

ん？なんでこいつら顔が赤いんだ？
風邪か？（白夜は自分の顔の良さをわかっていなかった）

「大丈夫か？」

俺は華琳に手を伸ばす

「え、ええ大丈夫よ」

華琳はその手を掴んだ

それが、霸王と天虎の初めての出会いだった

07 天虎く未来の覇王を救うく（後書き）

戦闘シーンかけてるかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8829z/>

もう一人の孫策～天虎の生き様～

2012年1月8日19時52分発行